



TITLE:

京大広報 No. 441

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 441. 京大広報 1993, 441: 479-490

ISSUE DATE:

1993-02-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209202>

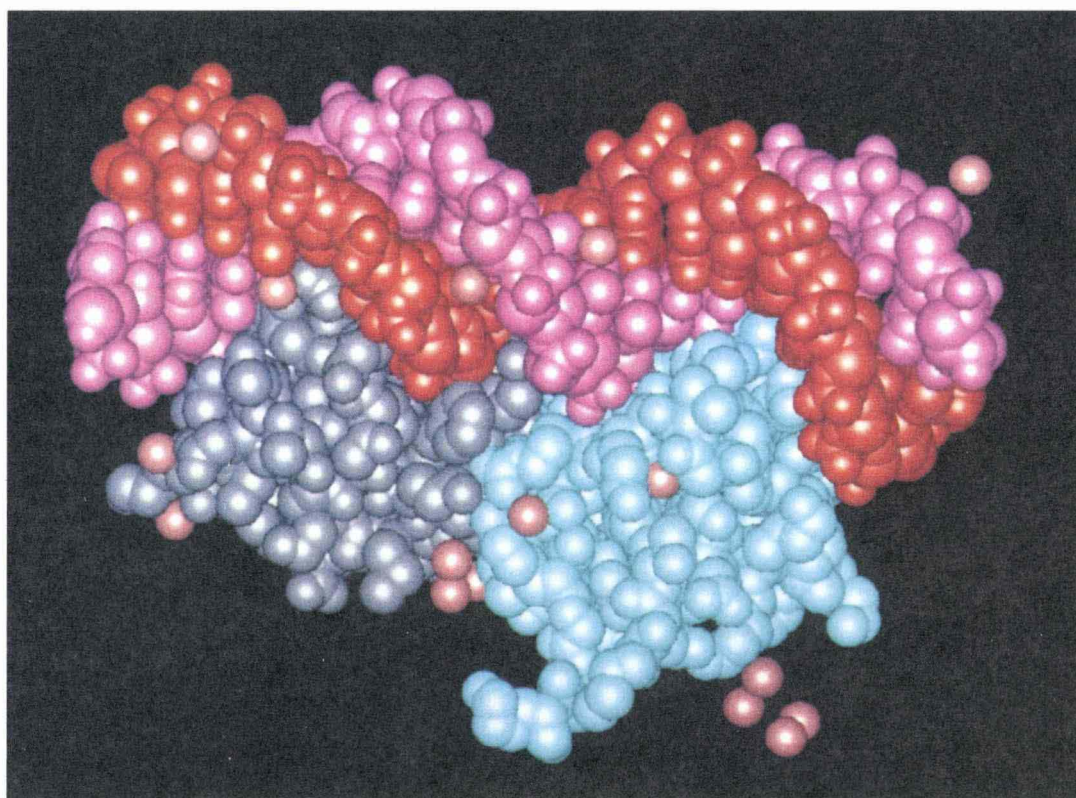
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

# 京大広報

No. 441

京都大学広報委員会



相互作用する DNA とタンパク質のかたちをコンピュータグラフィックスにより表示したもの。  
ピンクとだいたい色は DNA、灰色と水色はたんぱく質、はだ色は水の分子

—関連記事本文 484 ページ—

## 目 次

### <大学の動き>

平成 4 年度の停年退職教官	480
平成 5 年度 国立学校特別会計予算内示の概要	483
部局長の交替等	483
平成 5 年度入学者選抜学力試験 (第 2 次学力検査) の期日等	484
京都大学市民講座「かたち」講演要旨 (その 2)	484
計報	486

### <紹介>

埋蔵文化財研究センター	487
-------------	-----

### <随想>

麻酔の名の起こりと変遷	
名誉教授 稲本 晃	489

### <コラム>

3 L の充実	
経済学部教授 赤岡 功	490

## &lt;大学の動き&gt;

## 平成4年度の停年退職教官

京都大学教員停年規程により、次の方々（教授43名、助教授3名、助手2名）が、本年3月31日付けで退職される。

部 局・職 名	氏 名	生年月日	出身地 出身校	講 座 等	研 究 分 野
総合人間学部 教 授	大 橋 保 夫	昭和 4. 7.30	京 都 大	国際文化学科 言語文化論講座	フランス語学、特に音韻論、文法基礎論、フランス語史の研究。マルコ・ポーロ「世界誌」原典の研究
〃	新 田 博 衛	〃 4.10.28	京 都 大	人 間 学 科 人間基礎論講座	美学及び芸術哲学に関する研究
〃	豊 田 悦 夫	〃 5. 1.22	山 形 大	人 間 学 科 生活空間論講座	ドイツ憲法学の研究、特に議会論及び基本権論に関する原理的研究
〃	木 下 富 雄	〃 5. 3.25	兵 庫 大	基礎科学科 情報科学論講座	個人レベルから、集団、組織、集合レベルに至る人間の社会的行動の法則性の解明と、その制御に関する研究
文 学 部 教 授	平 野 俊 二	〃 4. 4. 5	大 阪 大	文化行動学科 基礎心理学講座	記憶の神経機構に関する生理心理学的研究
〃	松 尾 尊 允	〃 4.11. 1	鳥 取 大	史 学 科 現代史学講座	日本近現代史のうち特に大正デモクラシーに関する研究
〃	藤 縄 謙 三	〃 4.12.15	新 潟 大	史 学 科 西洋史学第一講座	古代ギリシア文化史及び社会史の研究
〃	岡 照 雄	〃 5. 1. 2	福 岡 大	文 学 科 英語学・英文学 第一講座	十七・十八世紀英文学の研究
〃	竺 沙 雅 章	〃 5. 3.14	京 都 大	史 学 科 東洋史学第三講座	宋代社会史の研究。中国仏教文化史の研究。敦煌文書の研究
大学院法学研究 科 教 授	香 西 茂	〃 4. 5.13	東 京 大	公 法 専 攻 国際法講座	国際連合の平和維持機能に関する研究
〃	阿 部 照 哉	〃 4. 7. 9	徳 島 大	公 法 専 攻 憲 法 講 座	憲法史及び憲法解釈に関する研究。ドイツ憲法の比較法的研究
経 済 学 部 教 授	高 寺 貞 男	〃 4. 6. 1	茨 城 大	経 営 学 科 市場・会計分析 講座	会計と「市場と組織」の相互関係の構造化理論による社会制度としての会計の制約性と可能性の研究
〃	石 川 常 雄	〃 4.12.12	京 都 大	経 済 学 科 国際統計情報・ 金融講座	「現代の金融政策」―マネー・サプライをめぐる理論と実証―に関する研究
理 学 部 教 授	丸 山 和 博	〃 4. 5.16	福 岡 大	化 学 科 有機化学講座	有機フリー・ラジカルに関する研究。グリニャール反応の研究。光合成に関する化学的研究
〃	志 岐 常 正	〃 4.11.11	佐 賀 大	地質学鉱物学科 地 層 学 講 座	碎屑性堆積層に関する堆積学的海洋地史学的研究

部 局・職 名	氏 名	生年月日	出身地 出身校	講 座 等	研 究 分 野
理 学 部 教 授	池 部 晃 生	昭和 5. 1. 1	台 湾 東 大	数 学 科 共通講座応用数 学・応用力学講座	作用素論・数理論理学
〃	大 西 俊 一	〃 5. 1. 9	大 阪 阪 大	生物物理学科 量子生物学講座	生体膜の生物物理に関する研究
〃	日 高 敏 隆	〃 5. 2. 26	東 京 京 大	動 物 学 科 動物系統・遺伝 学講座	人間を含めた動物の行動に関するエ ソロジー的研究
医 学 部 教 授	山 田 淳 三	〃 4. 8. 27	山 口 東 大	附属動物実験施設	近交系ラットの遺伝学的同定のため の遺伝子座の開発とラット染色体地 図の作成に関する研究
〃	小 澤 和 恵	〃 4. 10. 20	京 都 京 大	医 学 科 外科学第二講座	肝ミトコンドリアの代償能に基づく 根治的肝切除に関する研究並びに生 体部分肝移植に関する研究
〃	佐々木 和 夫	〃 4. 11. 10	鳥 取 京 大	脳統御医科学系専攻 認知行動脳科学 講座	脳の高次統御機能に関する研究
〃	一 色 信 彦	〃 5. 1. 4	三 重 京 大	医 学 科 形成外科学講座	顎顔面の形成外科学に関する研究並 びに音声外科学に関する研究
医学部附属病院 教 授	堀 了 平	〃 4. 6. 6	和歌山 京 大	薬 剤 部	薬物体内動態の制御機構解明と医療 薬剤学への展開
薬 学 部 教 授	米 田 文 郎	〃 4. 10. 12	兵 庫 京 大	薬 学 科 有機薬化学講座	酵素, 核酸, その他生体成分の構造 と機能に関する生物有機化学的研究
〃	町 田 勝之輔	〃 4. 11. 6	新 潟 京 大	薬 学 科 無機薬化学講座	分子力学計算及び赤外・ラマンスペ クトルのコンピュータシミュレー ションに関する研究
工 学 部 教 授	山 田 善 一	〃 4. 4. 26	石 川 京 大	土木工学科 耐震工学講座	土木構造物の耐震工学・構造設計学 に関する研究
〃	東 村 敏 延	〃 4. 10. 13	兵 庫 京 大	高分子化学科 高分子合成講座	高分子の合成及び機能に関する研究
〃	庄 野 達 哉	〃 4. 10. 20	大 阪 京 大	合成化学科 有機合成化学講 座	有機合成化学における新領域の創造 に関する研究
〃	巽 和 夫	〃 4. 10. 31	京 都 京 大	建 築 学 科 建築計画講座	建築計画, 建築企画及びハウジング に関する研究
農 学 部 教 授	吉 田 陽 一	〃 4. 5. 7	大 阪 京 大	熱帯農学専攻 水産資源学講座	水産資源環境に関する研究
〃	重 永 昌 二	〃 4. 6. 3	滋 賀 京 大	熱帯農学専攻 熱帯農学講座	熱帯作物の育種・栽培学的研究
〃	岩 井 保	〃 4. 7. 17	京 都 京 大	水 産 学 科 水産生物学講座	魚類幼生の機能形態学的研究
〃	有 木 純 善	〃 4. 12. 12	鹿 島 京 大	林 学 科 森林経理学講座	林業構造の史的展開に関する研究。 東アジアのアグロフォレストリーの 比較研究



部 局・職 名	氏 名	生年月日	出身地 出身校	講 座 等	研 究 分 野
農 学 部 教 授	山 縣 弘 忠	昭和 4.12.18	奈 京 良 大	農 学 科 育種学講座	突然変異の誘発並びに誘発突然変異の育種利用に関する研究
農学部附属演習 林 教 授	和 田 茂 彦	〃 4. 8.10	高 京 知 大		森林の動態に関する研究
化学研究所 教 授	竹 中 亨	〃 4. 7.20	岡 山 大 広島大	界面物性研究部門	種々の界面における有機超薄膜の振動分光学的研究及び膜中の分子構造と機能との相関性の解明
〃	高 浪 満	〃 4. 9.15	富 京 山 大	生体分子情報研究 部門	遺伝情報伝達機構の分子生物学的研究
人文科学研究所 教 授	荒 井 健	〃 4. 5. 2	兵 京 庫 大	芸術史研究部門	中国古典文学に関する研究
原子エネルギー 研究所 教 授	岩 崎 又 衛	〃 5. 2.11	京 京 都 大	原子燃料研究部門	水素とその同位体の反応挙動及び分離、固定化プロセスに関する物理化学的研究
ウイルス研究所 教 授	由 良 隆	〃 4. 8.24	大 京 阪 大	遺伝子動態調節研 究部門	細菌の分子遺伝学・熱ショック応答の制御及びプラスミド複製制御の分子機構
経済研究所 教 授	瀬 尾 美巳子	〃 4. 8. 5	大 京 阪 大	経済計画研究部門	あいまい環境における多目的意志決定に関する研究
基礎物理学研究 所 教 授	横 山 寛 一	〃 5. 3.13	東 京 大 東工大	場の理論研究部門	可換及び非可換ゲージ場の量子論におけるゲージ構造に関する研究
ヘリオトロン核融 合研究センター 教 授	秋 宗 秀 夫	〃 5. 2. 23	兵 京 庫 大 阪大	超高温プラズマ加 熱研究部門	高温プラズマ発生及び粒子線理工学に関する研究
理 学 部 助 教 授	和 田 卓 彦	〃 4. 5.15	愛 京 知 大	理学部附属火山研 究施設	地球内部構造の研究及び火山物理学の研究
農 学 部 助 教 授	小 林 達 治	〃 4. 7.12	京 京 都 大	農芸化学科 植物栄養学講座	光合成細菌その他土壌微生物の有効利用法の開発。地球環境保全。有機物の効果。水稻多収穫法に関する研究等
〃	中 村 信 一	〃 5. 2.26	兵 京 庫 大	農林生物学科 応用植物学講座	ラン科無葉緑植物ツチアケビの菌根共生の研究
農 学 部 助 手	桂 利 夫	〃 4. 6. 8	京 京 都 府 立亀岡農学校	農学部附属農業簿 記研究施設農家経 済分析	農業簿記及び農家経済分析方法に関する研究
〃	寺 村 貞	〃 4. 7.13	京 京 都 大	農林生物学科 実験遺伝学講座	甘藷とその近縁植物の系統進化に関する遺伝学的研究

京都大学医療技術短期大学部教員停年規程により、次の方が、本年3月31日付けで退職される。

部 局・職 名	氏 名	生年月日	出身地 出身校	講 座 等	研 究 分 野
医療技術短期大 学部 教 授	齋明寺 央	昭和 4.11.14	兵 京 庫 大	看 護 学 科	鬱血性心不全の成因、病態生理及び治療に関する臨床的研究

## 平成5年度 国立学校特別会計予算内示（本学関係）の概要

平成5年度国立学校特別会計予算内示の本学関係の主な事項の概要は、次のとおりである。

なお、主な内容は予算成立後、本紙部局紹介等の記事により紹介する予定である。

事 項	備 考
薬 学 研 究 科 薬 品 作 用 制 御 シ ス テ ス 専 攻 の 設 置	修士 25人
工 学 研 究 科 専 攻 の 整 備  環 境 地 球 工 学 専 攻（博士課程）の設置	大学院重点化 化学系6専攻の大学院大講座化 化学系5学科の1大学科化 修士 106人→152人 博士 51人→72人 博士 17人
人間・環境学研究科 人間・環境学専攻（博士課程）の設置	博士 31人
医 学 研 究 科 専 攻 の 整 備	大学院重点化 生理系専攻ほか2専攻の大学院大講座化 博士 28人→34人
理 学 部 分 子 発 生 生 物 学 研 究 セ ン タ ー の 新 設	（時限10年）
生 態 学 研 究 セ ン タ ー の 整 備	寒帯生態部門の増設
医学部附属病院 総 合 診 療 部 の 新 設	（初期診療体制の整備とプライマリケアの教育の充実）
霊 長 類 研 究 所 の 改 組	大部門制 9部門→4（大）部門
食糧科学研究所 新 食 品 設 計 研 究 部 門 の 新 設	（時限10年）
経 済 研 究 所 国 際 政 治 経 済（外国人客員）研究部門の新設	（時限10年）
防 災 研 究 所 地 域 防 災 シ ス テ ム 研 究 セ ン タ ー の 新 設	（防災科学資料センターの廃止・転換）

## 部局長の交替等

## 数理解析研究所長

高須 達数理解析研究所長の任期満了に伴い、

後任として荒木不二洋数理解析研究所教授（応用解析第二研究部門担当）が1月31日任命された。  
任期は平成7年1月30日までである。

## 平成5年度入学選抜学力試験（第2次学力検査）の期日等

平成5年度入学試験（第2次学力検査）を、次の予定で実施する。

## ○ 前期日程試験

月 日	教 科	学 部	時 間
2月25日 (木)	国 語	総合人間「文系」 ・文・教育・法・ 経済「一般」	午前9時30分～ 11時30分
		総合人間「理系」 ・理・医・薬・農	午前9時30分～ 11時
	数 学	総合人間「文系」 ・文・教育・法・ 経済「一般」	午後1時～3時
		総合人間「理系」 ・理・医・薬・ 工・農	午後1時～3時 30分
	論 文	経済「論文」	午前9時30分～ 12時30分
			午後2時～4時 30分
2月26日 (金)	外国語	総合人間・文・教育・ 法・経済「一般」・ 理・医・薬・工・農	午前9時30分～ 11時30分
	理 科	総合人間「理系」 ・理・医・薬・ 工・農	午後1時～3時 30分
	社 会	総合人間「文系」 ・文・法・経済 「一般」	午後1時～2時 30分
	論 文	経済「論文」	午前9時30分～ 12時

## ○ 後期日程試験

月 日	教 科	学 部	時 間
3月13日 (土)	国 語	総合人間・文・教 育・経済	午前9時30分～ 11時30分
		医	午前9時30分～ 11時
	数 学	総合人間・教育・ 経済	午後1時～3時
3月14日 (日)	理 科	理・医・薬・工・ 農	午後1時～3時 30分
		教育	午後1時～3時
	論 文	法	午後1時～3時 30分

(注) \* 総合人間学部（後期）の外国語の試験において、ドイツ語、フランス語を選択した者は、聞き取りテストを行わないので、午前9時30分～11時30分とする。

京都大学市民講座「かたち」  
講演要旨（その2）

## 遺伝子のかたちとはたらき

化学研究所教授 金 久 實

親子が似る「遺伝」現象は、DNA（デオキシリボ核酸）という分子に書かれた遺伝情報が親から子へと伝えられて起こっている。DNAは4種類のデオキシリボヌクレオチド（A、G、C、Tの4文字で略記）が鎖状につながってできているので、遺伝情報は4文字だけのアルファベットで書かれた膨大な文章のようなものである。ある生物

がもつ遺伝情報の全体を「ゲノム」と呼び、ゲノムの中にはたくさんの「遺伝子」が含まれている。遺伝子の部分には生物の個体が生命活動を維持するために必要な部品、すなわちタンパク質など機能性分子の作り方が書かれている。ヒトのゲノムは30億の文字からなり、その中には10万の遺伝子があると言われている。

DNAやタンパク質など、生物を構成する基本物質はいずれも立体的に特異な「かたち」とってはじめてその機能を発揮する。つまり、これらの分子がお互いに固有のかたちを認識し作用を及ぼしあうことによって、生物の「はたらき」がうみ出されている。相手を認識できるかどうかは、ちょうどジグソーパズルのように、あるいは鍵と鍵穴のように、かたちがうまくかみあうかどうか



で決まり、この関係を立体的なかたちの「相補性」と言う。

生物学の実験技術のめざましい進歩により、ヒトを始めとするあらゆる生物に対して、ゲノムを構成する DNA の全文字列を解読することが可能になってきた。膨大な文字列情報の中には、機能性分子の三次元的なかたち（特異な立体構造）の情報を通して、生物のはたらき（機能）の情報が含まれている。国際的なレベルで進行中のヒトゲノム計画での重要な課題の1つは、DNA やタンパク質の文字列情報から、コンピュータ解析によりかたちとはたらきの情報を読み取る技術を開発することである。そのために生物科学と計算機科学を融合した新しい研究が行われている。

（平成4年10月31日講演）

## ~~~~~

### 神々のかたち

#### —民衆ヒンドゥー教の世界—

人文科学研究所助教授 田 中 雅 一

インドの大都市の路上や寺院の門前の露店で、しばしば印刷された神々の絵が売られています。本講演のテーマはこのような絵にあらわれるヒンドゥー教徒の神々の「かたち」であります。

まずヒンドゥー教の神観念についてお話したいと思います。興味深いことは、神々の種類は多様で、あらゆるものがヒンドゥー教徒にとって神となるといっても言いすぎではないのですが、にもかかわらずヒンドゥー教徒は神々は本質的に同じである、と考えていることであります。いろんな考えが存在しますが、たとえば神の本質は力であるという立場があります。そしてこの抽象的な力が具体的な形をとって絵や彫刻に描かれているような神の姿をとるとみなす考えがあります。また個別に神が認識されている場合でも、化身という論理によって同じ存在であると主張されることがあります。その例としてインドで人気のあるクリシュナとラーマがどちらもヴィシュヌという神の化身であるというものがあります。この化身とか生れかわりの論理は人と神の境界を曖昧にします。といいますのも非常に優れた才能を持つ聖者

はしばしば神の生れかわりとみなされるからです。その結果釈迦はヴィシュヌの化身としてヒンドゥー教のなかに位置づけられています。これが多様なものをまとめる原理と考えることができません。

ヒンドゥー教はしばしば、ユダヤ教、キリスト教やイスラム教などの一神教と対比されて、多神教の典型として論じられることがあります。多神教とは文字通り一つ以上の神を認めることであり、われわれ日本人にも理解しやすい宗教といえるかもしれません。しかし、ヒンドゥー教はある意味で一神教的な性格をもそなえています。というのも、ヒンドゥー教は神々のかたちのうらに本質的に同じものを想定しているからです。その本質がさまざまなかたちをとって現われるところにヒンドゥー教の多神教的な世界が成立する秘密が隠されているのではないのでしょうか。

（平成4年11月7日講演）

## ~~~~~

### 都市と造形

工学部教授 川 崎 清

建築や都市の形は、どうやって決めるのであろうか。都市は建築だけではなく、道路、並木、電柱、照明、或いは山や川など、色々な要因によって形づくられる。しかしその中でも最も影響の大きいのは建築であらう。

最近京都で京都ホテル、京都駅の問題を契機に景観問題がクローズアップされて来た。最初は高さが問題だと言われたが、最近は高さだけではなく、結局デザインが問題なのだと言われている。鉄やコンクリートなどの近代建築技術が現われるようになって形が自由に造れるようになった。その事が景観の乱れる一因になっている。かつて、木造の町並みの時代は素材の持つ制約と伝統的な技術の為に、全体のスケール、形がほぼ揃って、町並みとして調和した景観が保たれていた。それらを考えながら現代建築、或いは現代都市の形はいかにあるべきかを考える必要がある。

日本の都市は本来木造都市である。日本の家屋の多くは木と土と紙で出来ており、素材の寿命が



短く、且つ、気候風土に弱いため、絶えず部分的な更新から全面的な改築まで容易に行われることが前提となっている。即ち仮設の性格をもっている。一方で近代化過程で入って来た建築技術は、恒久的な性格をもっていると言われている。しかし実際はどうであるかと言えば、災害の無い京都でも既に昭和初期の鉄筋コンクリートの建物が僅かしかないと言うことは、50~60年しかもたないことになる。理由は色々あるが、材料的な寿命というよりは社会的機能的変化によって建て替わるものが多い。近代構法による建築も仮設的な性格があると言えるが、もっと積極的に都市をシミュレーションするための実験性を持っていると言えないだろうか。即ち仮設の意識をどう乗り越えて実験性に迄高めるかということが一つの問題である。

第二はやはり、木造という構造形式のため、寺院などの特殊なケースは別として、一般家屋ではそう大規模な建築は建たない。従って、せいぜい2~3階止まりである。このことは木造の建物全体がヒューマンスケールの範囲で出来ていることで、伝統的な街並みもまた、人間になじむスケールで出来ていた。石造を中心に発達したヨーロッパの諸都市はもともと木造都市に比べてスケールが大きく、伝統的にアーバンスケールの感覚を身につけていると言っていい。いま、日本の都市についてヒューマンスケールとアーバンスケールの統合を解決することが迫られている。

第三は、日本人特有な空間感覚である。日本人の空間感覚はあまり外向きでない。内へ内へと潜む感覚である。もともと日本の地形は、複雑でモザイク状に分割され、都市は谷間、盆地、扇状地形、河口のデルタ地帯など、僅かな平地を利用して周囲や背景の山に視界を限定されたところに発達してきた。従って、ヨーロッパの諸都市の様に平原の中に同心円状に無限の広がりを持つ空間を觀念することはない。日本の空間觀念を良く表わしているのは、神社の参道である。山ふところの僅かな距離を利用して神秘性を高める上手い演出が施されている。この参道は外側から奥へ誘導するための空間であって、決して内から外へ向かう空間ではない。そして一番奥へ至ると簡素な社があるだけである。神秘的な世界は自分の心で感じる

以外にない。ヨーロッパの王宮などのモニュメントを中心に外へ外へと広がりを見せる都市空間を遠心的空間と呼ぶならば、奥へ奥へと引き込まれ、結局は自分の心の中にしか広がりを見出せない空間を求心的世界とでも呼んでみよう。都市的な特徴で言うならば、一方は開放的であり、他方は閉鎖性に特徴があると言えよう。第三の問題として、我々は、閉鎖的求心的空間感覚から開放的遠心的都市感覚へ、移行することが必要である。

この様に日本の都市は時間の進行と共に、次第にそのパラダイムの変更を迫られている。仮設性から実験性へ、ヒューマンスケールからアーバンスケールへ、求心性から遠心性へ、乗り越えるべき課題は多い。

(平成4年11月7日講演)

## 計 報

### 平 井 章 理学部助教授

本学理学部助教授 平井 章先生は、12月31日逝去された。享年59。

先生は昭和30年3月大阪大学理学部物理学科を卒業、同35年3月京都大学理学研究科博士課程単位取得退学後、同年4月本学理学部助手、同43年7月同助教授に就任された。

先生の専門は電波分光學と極低温物理学で、磁気共鳴法による微視的観点からの磁性体、特に局在スピンを持つ酸化物磁性体の研究に先駆的な仕事をされた。極低温域における液体及び固体ヘリウムの研究を行い、量子固体の核スピン緩和機構、超低温における核整列固体  $^3\text{He}$  や超流動  $^3\text{He}$  のスピン動力学など量子凝縮相に特有の多くの現象を明らかにされ、超低温物理学の発展に大きな貢献をされた。

全学の液体ヘリウム供給体制の建設と運営に尽力され、学外においても低温工学協会関西支部長をつとめられるなど、低温研究の推進と育成にも多大の貢献をされた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(理学部)

## &lt;紹介&gt;

## 埋蔵文化財研究センター

埋蔵文化財研究センターは、本学敷地内の埋蔵文化財に関する調査計画の立案，調査研究，保存及び成果報告の作成を行うことを目的として活動している。組織や事業についてはすでに本広報のNo. 149, 170, 319などでふれているので，ここでは当センターが昨年北部構内の西南隅にあたる理学部動・植物校舎新営に伴う発掘調査で発見した，地震による地盤の変化，古代の土坑，および幕末の土佐藩邸に関連する遺構について紹介する。

地表下約 3.5 m の縄文時代晩期の堆積層で，ほぼ東西方向に延びる砂を含んだ地割れを多数発見した。これは下層の砂が地震により液状化し，写真 1 のように当時の地表面へ噴出した痕跡で，噴き出した砂脈はさらにその上に堆積した弥生時代中期の層を貫いている。こうした自然災害の痕

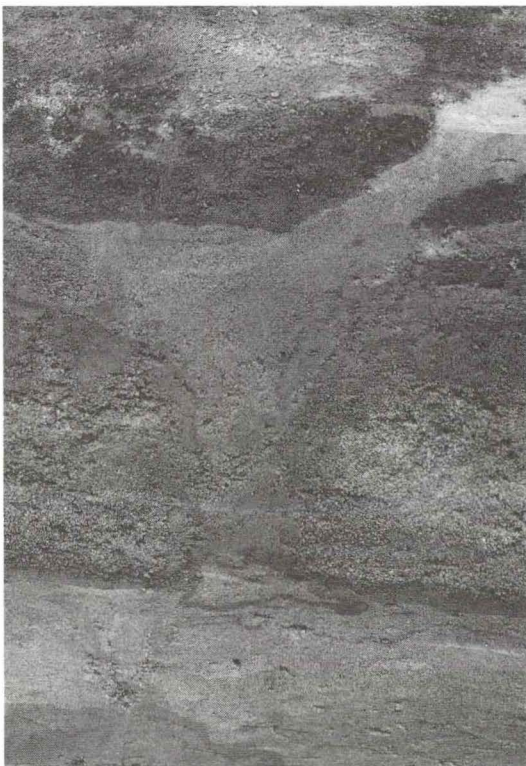


写真 1

砂脈の断面

跡の調査結果は，歴史的環境の復元を進めるうえで貴重な資料となる。この地震による当時の地形の変化などの分析にあたっては，理学部地質学鉱物学教室の協力を得た。

古代の遺構としては，10世紀の埋納遺構を検出した。径約 50 cm の土坑の中に，土師器とよばれる素焼きの土器の甕の上下に，重ねた 2 枚の皿がそれぞれ置かれた状態で出土した（写真 2）。上の 2 枚の皿の底には金箔が張りつき，錆びた銭貨も付着していた。こうした日常生活跡ではみられない土器の特殊な出土状況から，蔵骨器，鎮壇具などの可能性を考えている。

この時期の埋納遺構に関連して，文献の上から吉田寺と吉田卒塔婆供養所があげられる。吉田寺は、『天台座主記』の「良源伝」貞元 2（977）年 4 月 7 日条に，神楽岡吉田社北に建立したとある。一方，権大納言藤原行成の記した『権記』長保 3（1001）年 6 月 20 日条には，「吉田社北三丁内有葬送之處」とある。応仁の乱以前の吉田社は，旧教養部北半の吉田二本松町付近に比定され

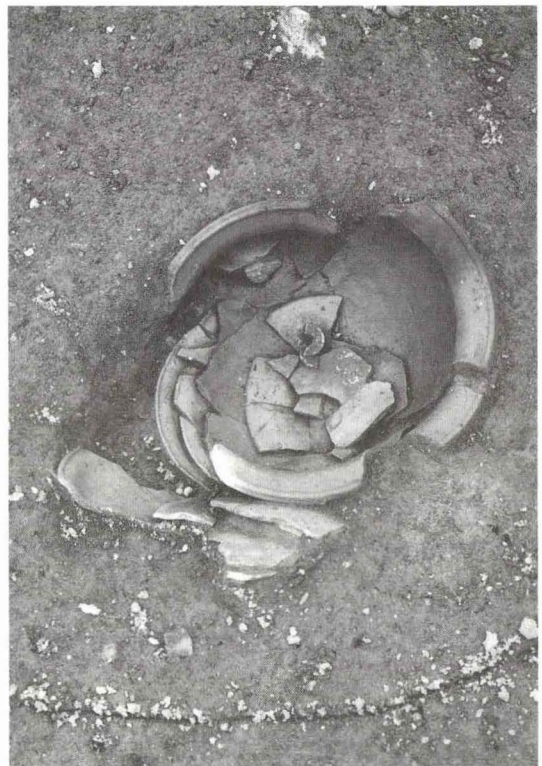


写真 2

古代の埋納遺構



ており、本調査区がここにいう葬送の場所に含まれていた可能性が高い。さらに、藤原実資の『小右記』永祚元（989）年9月26日条に「吉田卒堵婆供養所」において、卒堵婆616本を造立し、供養をおこなったという記事がある。

近世の遺構では、幅 2.9 m、深さ約 1.1 m の東西方向の堀を、長さ 48 m にわたって検出した（写真 3）。堀は理学部正門近くでいったん途切れ、西端も発掘区外に延びており、東西の長さは不明である。この堀からは幕末の棧瓦が出土した。大部分は破片であるが、一枚の瓦に大まかに換算すると400枚をはるかに越える数である。慶応 4（1868）年刊の竹原好兵衛版『改正京町御絵図細見大成』には、後二条天皇陵と百万遍知恩寺の間に土佐藩の藩邸が描かれており、検出した堀がこの藩邸の南を限る堀であることが明らかになった（図 1）。なお、堀の途切れた部分は門に通じる土橋と考えられる。出土した棧瓦は、その端面に「アキ文」、「アキ兼」、「安喜寅」など瓦の製造元の屋号を刻印したものが多いが、京近郊では棧瓦に刻印を施す例はない。また、棧瓦は一般に正面からみて「へ」の字形をして、左から右に葺くが、堀から出土した棧瓦の中にはこれとは逆に、右から左に葺く「逆棧」と通称される瓦が多い。京近郊の近世の遺跡で「逆棧」が出土した例はほとんどない。これらのことから、出土した瓦は、土佐など京外から搬入された可能性もあり、現在調査中である。

この土佐藩邸をはじめとする藩邸は本来京内にあったが、幕末の動乱をひかえ、各藩がよび寄せた藩士の駐屯のための藩邸を京近郊に多数設置した。今回調査した土佐藩邸や本部構内西半部に比定されている尾張藩邸などもこうしたものである。土佐藩邸はのちに陸援隊の中岡慎太郎が借り受け活動の拠点としていたことが、中岡の1866～67年の日記『行々筆記』にみえる。

埋蔵文化財研究センターは、ここで紹介したような発掘調査を学内の建物建設計画にしたがって実施しているが、事務局および工事担当部局からは多大のご協力をいただいている。末筆ながらお礼申し上げる次第である。

（埋蔵文化財研究センター）

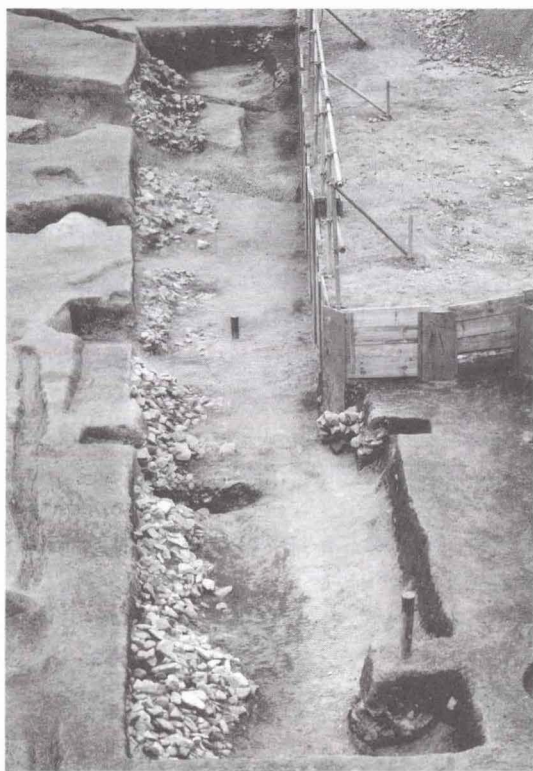


写真 3

土佐藩邸の南をめぐる堀

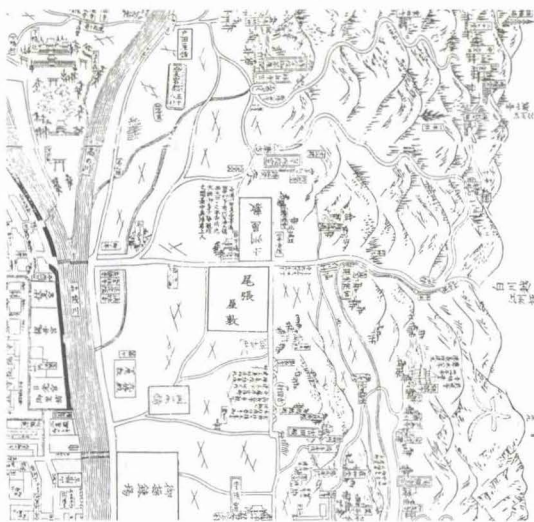


図 1

改正京町御絵図細見大成（部分）





